

近代日本語学と岩手 ～大槻文彦と金田一京助～

シンキング・バーズ
日本語研究班

日本語が 第三者的に見える

ワタシたちが住んでいる岩手県は、近代日本語学に関して二人の偉人を輩出しています。二人共、日本語辞書の編纂に関わった人物として知られています。一人は大槻文彦、もう一人は金田一京助です。

すでにご存知の方も多いとは思いますが、簡単に二人のことを紹介します。

大槻文彦は、陸奥国一関出身の蘭学者・大槻玄沢の孫にあたり、明治時代に日本初の近代的国語辞典『言海』を初期近代日本語で編纂、刊行しました。

金田一京助は、岩手県盛岡市に生まれ、大正から昭和にかけて、アイヌ語研究の先駆者になる一方、国語辞典の編纂に携わりました。戦後は、日本語学の第一人者の一人に数えられました。

●金田一京助の国語学への目覚め

ワタシが、この二人を取り上げるのは、東北地方にゆかりのある先人として誇りに思う一面と、東北地方と近代日本語の形成という一面に、興味をそそられるからです。

大槻文彦は、江戸生まれ東京育ちの学者ですが、金田一京助は、盛岡生まれです。明治時代ですから、想像するに、今とは比べものにならないほど「訛り」の強い言語

環境に育ったと思われま
す。金田一は、ワタシの
先輩が所蔵している母校
の記念誌で、山口青邨ら
との座談会に出席し、旧
制中学時代の体験をこう述べています。



「日本の文章というのも、こういう偉いものと初めて心うたれましてそもそも国語学というものを専攻しようという気を抱いたのはこの先生の感化でした。偉い人で、盛岡の人でした」

地元の人々の感化で、国語学を専攻しようという気になった！ ワタシとしては、とても感動的な逸話に読めました。

●日本語から少し離れた立ち位置

近代日本語は、江戸の武士階層のことばを基準に整備されたと言われています。かつては「標準語 (Standard language)」と呼ばれ、東北地方の出身者にとっては、言語差別の要因になった時代がありました。

その近代日本語の形成に、東北地方とゆかりのある人が、深く関わっている。そのことを、どう考えれば良いのでしょうか。

金田一は、その著書で、日本語の特性として、①音節が極端に簡単、②語節が極度に複雑、③二重母音を持たない、④敬語が見事に発達、を挙げています。この分析の正否はともかく、ここには、関東や関西のことばに対する立ち位置の第三者性がある、とワタシたちは考えています。

※参考にさせて頂いた資料)

◆一関市立博物館

『文彦と言海』

<https://www.city.ichinoseki.iwate.jp/museum/collection/det35.html>

◆書籍

- ・白亜 90 年史編集委員会編『白亜 90 年史 1970 座談会・明治期の思い出』(岩手県立盛岡第一高校、昭和 45 年)
- ・金田一京助著『日本語の変遷』(講談社文庫、1992 年)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
大槻文彦と金田一京助

2018 年 9 月 9 日 (初版) 発行

著 者 : シンキング・バース

日本語研究班

発行者 : 遊佐 芳泰

発行所 : **シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田 1 0 5 番 5 号

電話 / F A X 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。